

佳作

海の上のトライアングル

福岡県 福岡教育大学附属福岡小学校二年 小森 圭悟

とびらをあげたしゅんかん、しおのかおりがほかにする風がぼくの顔にふきつけてきた。星空の下を、船はものすごいスピードで海をかけていた。

「うわあ、きれい。」
と、ぼくは思わずつぶやいた。神戸のまちがキラキラと光かがやいていて、とてもきれいだった。遠くには、くらい海の上に大きなトライアングルが二つならんでよこたわっていた。トライアングルのななめのぶんはピンク、青、緑色に光っていて、そのまっすぐなぶんはオレンジ色の光がいくつもうごいていた。

だんだん、遠くに見えていたトライアングルが近づいてきて、ぼくの目に入りきらなくなってきた。目の前にあらわれたのは、明石海きょう大はしだった。神戸とあわじ島をつないでいて、大はく力だっ

た。船は少しかたむいているし、風も強くて立っているのもたいへんだったけれども、美しさに見とれて気にならなかった。

いよいよ明石海きょう大はしの下を通った時、「ゴーゴー」というふきつける風の音と、「ザバーン、ザバーン」というなみしぶきの音と、「うわあ」というみんなのかん声が聞こえた。空気をすつてみると、海のおと風がまざったあじがした。さわってみると、少しベタベタした。風は生ぬるかっただれども気もちよかった。またからはしを通る車が見えると思っていたけれど、じっさいには見えなかった。十びょうほどで通りすぎて、見たりかんじたりするのはあつという間だった。

通りすぎると、また光かがやくまちなみが見えた。後ろをふとふりかえると、はしはどんどん小さくなって、またくらい海によこたわった光る二つのトライアングルにもどった。

ずっと見とれていると、どんどんはなれてかすかに見えるぐらいになっていった。それを見ながらぼくはこう思った。つぎは明石海きょう大はしの上を車で通って、ぼくののったフェリーをはしの上から見てみたい。